財団法人日本古医学資料センターの抱負

太田典禮*

当財団は、名の示すように、日本における古医学資料の収集保存をめざして、その散逸滅失を防ぐために設立されたものである。昭和47年2月公益法人として文部省から認可され、やっと1年余りたったところである。現在までは、計画準備に追われ、活動はこれからであり、ようやく緒についたところである。

そもそもの事業は、国家が進んでやるべきことなので、はじめ私達は政府に対して国立の医学博物館建設を要請したのであるが、科学博物館はあるし、科学の各分野にわたってそれぞれの博物館をつくることは不可能に近い、予算もとうてい取れそうにないというすごい、態度である。医学は特別であって、科学全体に匹敵するほどの重要性をもっていることを力説したが、理解されないの、民間の法人として浄財を集めて目的を達成するより途がないことになったのであるが、やり出してみ、いかにむずかしいかを、いやというほど味わわれた。

1. 認識の低さ

私は十数年前から、医学博物館の設立を提唱していたのであるが、ほとんど反響がなかった。「日本医事新報」の年頭雑感に書いたときも、賛成激励の葉書もらったのは、ただの1通だけだった。その後知人や先輩に協力をたのんだが、大事業すぎるといって相手にされず、大ボラ吹き扱われた。

医学、医術のにない手である医師の多くは、残念なことに営利にこれ走り、実利的な研究には熱心でも、基本的な学問や古い医学の重要性には関心がうすく、とくに明治から西洋医学に切りかえられたため、古医学の意義

は認識されていない。医師の団体である医師会も単なる業権擁護組合に墮し、政治献金の金集めはしても、古医学研究や医学啓蒙活動には熱心でなく、お座なりですませている。武見会長にも話して、長い間会長をしてきた記念にでも考えてはどうかとすすめたが、医師会として大規模な医学研究センターを計画しており、その中に医学博物館もある、とのことだったが、この大風呂敷はひろげっぱなしのままで、待てど暮らせど具体的な企画はいっこうに出てこない。

政府の認識はいっそう低い。当財団の認可申請に当たっても、文部省はその必要性を充分感じていなかったようで、そういう古い資料が今日の研究にどれほど大切なのか、ときかれて呆れかえってしまった。そんなことは百も承知のはずの文部省と思っていたので、どう説明してよいかとまどった。医史学会に知恵を借りにいったら、学会成立当時の趣意書とその後助成金申請のときの文章の写しを示されたのでそれを文部省へもっていった。内容は記すまでもないと思うが、要は、医史学は医学発達の歴史を研究する学問であり、医学の現状を正しく把握し、その将来の方向を知る上に極めて重要な学問である、ということである。

この分野の日本の研究水準は欧米にくらべて非常に立ちおくれっていて恥ずかしい状態であり、日本の医師は今までの数倍ないし十倍も医学の歴史を勉強しなければ世界の進運に歩調を合わせることができない、のである。

医学の教育、研究の中心である医科大学も明治の学制一新で、西洋医学をとり入れたものの、欧米のような学問的伝統がなく、日本でつみ上げられた古医学の貴重な資料は見向きもされない。最近の新設大学はなおさらである。

* Tenrei ÔTA, 専務理事

2. 財団の発足

財団設立には苦労したが、幸いに有力な方々のご支援をえて意外に早く認可された。昭和 30 年日本医学総会が京都で開かれたとき、京都国立博物館で、医学に関する美術の展覧会が開かれ、その展示品はあとで立派な本として出版された。このとき中心になられた三浦百重先生が鳥取大学学長を退職して京都へ帰られたのを機会に、昭和 46 年春、友人の阿知波五郎先生といっしょに相談にゆき、当時の博物館の相当官で熱心に事に当たられた景山学術課長をたずねて計画を進めた。当時の塚本館長もたいへん協力的であった。

一方、会の方針や役員構成については、医史学会の小川鼎三、緒方富雄の両大家が私の旧友なので、積極的な援助を請うて快諾を得、また医学史研究会の丸山博先生とも旧知の間柄であったので、両学会を中心に有力メンバーの協力を得て堂々たる役員をお願いすることができた。ところが三浦先生の健康がにわかに悪化し、ついに 46 年秋なくなられたので一頓挫をきたしたが、私が代りに責任をとってどうにか認可をとりつけることができた。なお、会の運営指導上、政界の長老東舜英先生を理事長にお願いできたことも幸いであった。こうして次のような役員ができた。

理事長	東 舜 英	元代議士
専務理事	太田 典禮	医博・太田リング研究所長
理 事	大塚 敬節	医博・日本東洋医学会評議員
理 事	大鳥蘭三郎	医博・慶応大学教授
理 事	緒方 富雄	医博・東京大学名誉教授
理 事	小川 鼎三	医博・東京大学名誉教授・順天堂大学教授
理 事	小石 秀夫	医博・大阪市立大学教授
理 事	宗田 一	医博・大阪大学講師
理 事	藤野恒三郎	医博・大阪大学名誉教授
理 事	丸山 博	医博・大阪大学教授
理 事	矢数 道明	医博・東亜医学協合理事長
理 事	鈴木 雄二	元代議士・(株)小田原魚市場社長
監 事	木下 正一	医博・賛育会病院長
監 事	池田 弘	税理士
評議員	赤松 金芳	医博・京浜女子大学教授
評議員	安芸 基雄	医博・虎ノ門病院神経内科医長

評議員	伊沢 凡人	医博・漢方処方相談所主宰
評議員	今田 見信	医歯薬出版(株)代表取締役・歯学史研究会理事
評議員	大矢 全節	医博・日本医史学会理事
評議員	岡西 為人	医博・塩野義研究所
評議員	鍵山 栄	医博・鍵山医院長
評議員	川上 武	医博・杉並組合病院
評議員	木村 康一	医博・名城大学教授
評議員	佐藤 美実	医博・元三楽病院婦人科部長
評議員	鈴木 勝	医博・日本大学総長
評議員	鈴木 宜民	医博・千葉大学教授
評議員	高山 坦三	医博・札幌医科大学名誉教授
評議員	津崎 孝道	医博・日本歯科大学教授
評議員	戸刈近太郎	医博・名古屋大学名誉教授
評議員	三廻 俊一	医博・日本医史学会評議員
評議員	望月 学	医博・若葉医院
評議員	柳沢 文徳	医博・東京医科歯科大学教授
評議員	柳田 秀一	医博・衆議院議員
評議員	山形 敏一	医博・東北大学医学部教授
評議員	山田 平太	医博・名城大学教授
評議員	渡会 浩	医博・渡会診療所
評議員	和田 正系	医博・東洋医学会評議員

3. 古医学資料の現状

財団の活動について最も頭をなやましたのは、何から手をつけるかであった。急を要することから先にすべきなのはいうまでもないが、緊急と思われることが殺到している。

まず、資料収集保存の具体的活動について、とりあえず、現状を把握し認識してかかる必要がある。

(1) 古医学資料

資料は漢方医書を中心に、キリンタン医学、蘭学医書に及び、解剖図から名医の肖像画や書画類、治療機械、製薬道具、ハリ灸の器具、経絡人形、薬品など多岐にわたっており、医書も診察治療書から、医学の歴史、伝記、古い記録と複雑である。

古い資料は篇学の士によって僅かに守られてきたにとどまる。明治の末には、これが次第に見なおされ、富士川游の「日本医学史」をはじめ、土肥慶蔵・呉秀三・富士川游らの「日本医学叢書」・「産科叢書」などがまとめられた。一方、明治末から東洋医学、皇漢医学復活の動きが、和田啓十郎、湯本求真らによってまき起され、漢方医学の再認識を呼びかけた。

しかし、多くの資料はすでに失われ、今日残されているものも保管が充分でない。とくに民間所有のものは、あるいは死蔵されまたは眠っていて研究の役に立たないばかりか、滅失の危険にさらされている。ことに近年の都市改造、住宅新築などのため、古い土蔵はこわされ、中にある古いものは捨てられる。その速度はますます早められており、これらへの対策は急を要する事態である。

近年、公害、薬害など薬の副作用が問題になり、漢方薬が見なおされ、また中国のハリ麻酔をはじめハリ灸治療が大きく浮び上ってきたので、古医学への関心が高まっていきが、重要文献の多くは雲の上にかくれている。

古い資料の保管状態を調べてみると、その多くが骨董品扱いにされてバラバラに保有されており、とくに民間の資料には門外不出になっているものが少なくない。公のものも余り活用されていない。

東大には幕府の学問所から引きついだものがあったが、関東大震災でその多くが焼かれてしまった。地方の大学も各藩の所蔵を受けついだところには多少あるが僅かであり、しかも明治初期の医学校はほとんどが明治20年に廃止された。

徳川幕府の遺産は、大学以外のところに引渡されたものが多い。宮内庁書陵部という古風な機関と内閣文庫に貴重なものが保管されている。国立国会図書館は上野にあった帝国図書館を引きついだっており、かなり古いものがあるが、貴重本として公開されないものもある。

そういったことよりも、私の心を直接にゆすぶったのは、私の祖先からの遺産であった。私の家は医師として300年以上つづいて、代々典禮を襲名している。父はいつも、うちには沢山な古い医書が残されている、ぜひ一応目を通したい、といったのを子ども心におぼえていた。しかし父はそれを果たすまでに働き盛りの50代で死去した。私は医者になってから、父の望みを遂げたいと思いながらも俗事に追われてやはり打ちすてていた。小さいとき弱かったのに幸い思いがけなく長生きして、少しひまな身分になった。郷里の屋敷にたてた病院の分院に医者が出たので、代りの来るまでという約束で、久しぶりに郷里に住むこととなり、ようやく古医書の整理に手をかけた。すると学生時代にちょっと目を通した記憶にあるもので見つからないのがかなりある。昔からの古い産科器械や漢方の薬欄、膏薬つくりの土鍋などは昭和2年の丹後震災で古い診療室がつぶれてなくなった。また私の留守に土蔵を処分したので、製薬用の薬

研などが捨てられてなくなっていた。土蔵にあった古文書などは湿気と虫ですっかりだめになっていたという。薬籠は桑の木に銀細工で立派なものだったが、一對あったのがひとつになっていた。経絡の土人形のみ体はどうにか残っていた。古医書だけは祖父が隠居の屋根裏を書庫にして保管していた。たんねんにタバコの葉を挟んで虫よけしてあったので保存はしっかりしていたが、やはり紛失しているものも少なくない。それでも本をめくってみてその勉強ぶりには脱帽、最敬礼した。私の息子は医者でないので、私が整理しないとなくなってしまうところだったと思うと、はじめて長生きのありがたさを知った。

私の家と同じような運命の人々が少なくないにちがいないと思うと、じっとしていられなくなって乗り出す気になったのである。周囲のものは、年にとって無理をしないでいいじゃないか、家にあるものはどこかへ寄付すればよい、というが、寄付先が果たして整理保存してくれるか不安である。大学でもどこでもこんなものを大切に整理してくれるところはない。京都府総合資料館や丹後郷土資料館があって文化資料を収集整理しているが、自然科学、医学関係は不得手だという。

(2)「医心方」

世界的文献といわれている有名な「医心方」を例にあげてみると、周知のとおりときの典薬頭丹波康頼の原本は幻の書となっている。数年がかりで本ができたのは、円融天皇の永観2年(984年)で、これを天皇に奏進した。現存する日本最古の文献として知られている。隋唐医学の粋を集めたもので、宮廷で珍重され、丹波の子孫はその一部を抄出して「医心方略」などをつくったが、その後、宋医学が移入され、民間医学が盛んになると、「医心方」は見向かれなくなって数百年たった。正親町天皇のとき、ときの典薬頭半井瑞策(和氣家の流れ)に下賜され、以来半井家に秘蔵されていると伝えられているが、明治以後、ほんものにお目にかかった人は誰もいないという。これも第22巻は写しであって、原本はいつの頃か他人の手にわたったといい、その後徳富蘇峯の所有となり、現在は主婦の友社のお茶の水図書館にあり、重要文化財となり門外不出とか。鎌倉時代の写本、仁和寺本(国宝)も完本ではなく数巻しかない。

幕末に幕府の力で医官の多紀家が半井家から借り出して写本をつくったのが宮内庁本で完本が現存している。これをもとに版をおこしたのが安政版で、30巻揃っているのが国立国会図書館にも二通りあるが、第28巻の房

内篇は貴重本として貸出さない。特別の手続きをとれば拝観できるだけで、写すことはできない。東大にも安政版があるが、欠本である。その他公の図書館にも完本はない。安政版は民間にはまだいくらか秘蔵されているようだが、どこにどれくらいあるのか全くわからない。

明治 42 年、安政版の版本から浅倉屋版が少数つくられたが、第 22 巻の妊娠図の赤刷りがぬけており、この浅倉屋版も図書館などでは見出しにくい。民間にはいくらか残っているとのこと。

この少し前に、明治 39 年、「日本医学叢書」（土肥慶蔵・呉秀三・富土川游撰、金港堂刊）に「医心方」が入れられたが、第 28 巻の房内篇のため発売と同時に発禁となり、第 28 巻を抜いて発売したのが現存しているが、慌てたせいか第 27 巻の後半から第 28 巻全巻と第 29 巻の前半が削除され 405 頁から 430 頁までの 26 頁が落丁になっている不体裁きである。

下って昭和 10 年 (1935)「日本古典全集」の第 5 期に、安政版の縮刷本全 7 冊を出したが、やはり房内の 28 巻に伏字が多い。伏字のないのが僅かつくられ、特別研究者の手に渡ったのがあるとのことだが、一般人にはお目にかかれない。伏字本もめったに古書店に出ないし、数万円という高価である。

一方、中国では明治時代にこの本の価値を認め、とくにこれに引用されている本で中国でなくなった本をいくつも復原したほどであるが、革命後間もなく、1955 年に人民衛生社から安政版の縮刷を出した。日本にも輸入されたが、これも僅かであってもはや入手しにくい。

以上のようなありさまなので、古医書に関しては、協会の MEDLARS サービスどころではない。漢方がコンピューターにのりにくいという欠点もあり、国会図書館や北里記念図書館など、せっかく高い機械を入れたものの、まだ宝のもち腐れの状態である。

分散しており滅失の危険にさらされ、あるいは秘蔵・死蔵されている古医学の諸資料が収集され、安全に保守され、さらになるべく広い範囲の研究者に提供されることこそが必要である。そうなのはじめて古医学資料は社会の要請に応える今日的意義を持ち、医学本来の目的に添うて生かされる。ところが残念ながら現状は、それらの資料は分散秘蔵され閲覧も極端に不自由なありさまである。さらにそういった不自由な状態の中で研究者がたいへんな骨をおって調査研究をしても、こんどはその成果をひとり占めしたがる傾向が少なくない。ほかの多くの研究者が同一の研究を手がけるのを嫌う。そもそも

資料が広く利用しにくい状態だからなかなか研究しにくいところへもってきて先達の秘密主義、己れ 1 人を高きにおこうとする考えが、困難さに輪をかける。資料の利用の不自由さにのりかっけての狭量な利己主義——これは入手・発見した資料の秘蔵・秘匿・門外不出につながり、ケチな根性といえるだろう。それはそのまま学問を私物化する精神である。もちろんほかの世界にもよくあることだろうが、貴重な諸資料が広く公開されないというところに大きな原因がある。

最近、古い資料の複製や国訳が出だしたのはたいへん歓迎すべきことである。しかし需要がそう多いわけではないから、商業出版としてはどうしても漢方薬やハリ灸などの実用に役立つものに限られるきらいがある。そこで当財団は、重要文献の複製に着手した。「医心方」・「本草図譜」をはじめいろいろな原資料を複製して提供し、学界の希望に応える方針である。なお、前に述べた昭和 30 年の展覧会の「医学に関する古美術聚英」と次の 34 年の医学総会の「近代医学のあけぼの」の再版も近くできあがることになっている。

4. 高まる気運

貴重な医学資料を守ろうという気運は、古い文化財を守ろうという線と歩調を合わせて高まりつつある。

(1) くすり資料館

私達が計画をすすめたところ、すでに「くすり資料館」の設立が発表されていた。エイザイ製薬会社の内藤社長が私財を投じて財団法人をつくり、同社の岐阜羽島工場に接して資料館を建設しようとしたもので 46 年 6 月開館された。医薬界としてはじめての企画で、まことに奇篤なこととして大きな期待を抱かせたが、考えさせられるところもあった。くすりは医学の重要な部分であり、くすり資料は医学資料と同じものが多い。別々の資料センターをつくった方がよいのか、ひとつにまとめるべきものか。くすりの方が先だったのだから、われわれ医学の方が合流するのが順序のようにも思えるが、内藤財団は計画どおり進められたので、そこへ医学をもち込むのは無理がある。しかしなぜこれをはじめから医薬資料館として出発できなかったのか、残念である。これには薬関係者も医学関係者ともに責任があるのではない。「くすり資料館」計画の発表がどういう形で、どの範囲へ協力が呼びかけられたのか詳しくは知らないが、かなり広く呼びかけたがあまり手ごたえがないので単独計画に走らざるをえなかったようである。製薬業界で

は、新興の一会社ではたいしたことはできまい、会社宣伝のひとつにすぎないだろう、というやっかみもあったらしい。はじめからエイザイ中心の計画だったため他の会社が協同しようとしなかった面もあるようだ。ここに日本のこうした業界の狭量さを見せつけられる。医学界の方はまた妙なプライドをもっている。くすり資料は医学資料の中に、いやその下部になるべきで、「くすり資料館」より「医学資料館」を計画すべきである、といったのであろう。それなら医学界から先に呼びかけるべきであった。医師会はもとより、医学会、とくに医学史研究者の責任がここにもある。せめてエイザイからの呼びかけを受けとめて大きく医学資料館構想へ発展させるべきではなかったか。

東京本社へ連絡を頼んでおいてから、京都の阿知波五郎先生といっしょに見学に行った。思ったより大きな規模で、内容もかなり充実しているのに感心したが、協力者は果たせるかな少数者に限られている。薬学の長老清水藤太郎博士のグループを中心に、老舗平安堂の文庫をはじめパロチン発明の緒方章博士の長寿文庫など貴重なものが集められているものの、古医書は失礼ながらややお寒い。売薬の古いカンバンがたくさん集められていて興味深かった。でもとにかく、ここまでつくられたら、しだいに充実されるであろうし、そうしなければならないと思う。ただ残念に思ったのは、医書などの資料を豊富に集めている武田製薬などの同業者の支援が見られないことである。

(2) 古医書目録

昭和46年9月、医書出版の大御所金原書店が、創業百年記念事業として古医書目録作成計画を発表し、将来は医学博物館へとの構想を述べた。私の方は財団申請中の認可待ちで、どうきまるかわからなかったため、財団認可の後に話し合いにいった。これも殊勝な計画で高く評価しなければならないが、「くすり資料館」と同様一業者の事業の限界を感じた。

さすがに医学界の協力が見られるが、医書出版界はやはり傍観的である。金原書店はまず資料の存在を調査することで収集までは当分手がまわらないとのこと。同じ目的なので何とか協同できないものかと思ったが、企業体意識が強いのか、わが道をゆく構えなので深く話し合えないで帰った。果して、自らの財団法人を申請し、古資料の復刻を主目的として昨47年11月認可をとりつけた。日本の企業の過当競争的対立と非協同性をまたここにも見る。これでは大きな目的を達成することはむずか

しい。何とかして企業利己心を超えた協力態勢を整えたいものだと思う。

(3) 東洋医学研究所

北里研究所がこの昨年6月に東洋医学研究所の設立を発表した。西洋医学陣営が東洋医学の研究に本格的にのり出したはじめとして注目され、期待されている。

こうして古医学資料が見なおされ、その必要が再認識され、他の医科大学も古医学資料に関心を高めてきた。当財団の発足に際して維持会員の申出をされた大学は、北里大学と慈恵医大であり、製薬会社は塩野義1社から申込みがあった。

(4) 日本漢方医学研究所

これは津村順天堂が3年がかりで認可された財団法人(昭和47年3月)である。

5. 古医学展示会

近年小規模だが見ごたえのある展示会がいくつか開催された。

(1) 若越医学史展

その第一は昭和47年4月29日～5月28日の若越医学史展で、キリンタン医学から蘭学におよび、小浜藩の杉田玄白のものをはじめ、京都、大阪からも資料が集められた。地方でこうした展示会が行なわれたのには、この地方で名医が輩出したからというだけではなく、その地に熱心家があり、資料保存も充実されていたからである。あとで展示品が「若越医学史展」にまとめられ、福井市博物館をはじめ各市の図書館の努力がうかがえる。とくに医史学会員の岩治勇一先生らの熱意が原動力になっている。ただ惜しまれるのは、せっかくの資料が不便な地方にあり、しかも分散されているので、一部の人々の目にふれた程度であったことである。

(2) 佐藤泰然資料展

昭和47年5月、佐藤泰然歿後百年記念展示会が順天堂大学で開催された。泰然・尚中の遺墨をはじめ、訳書や書簡、さらに幕末から明治初期の顕微鏡や外科道具など32点の貴重な資料が展示された。

(3) 第41回日本医学図書館協会総会医学史料展

昭和45年に第41回の日本医学図書館協会総会において横浜市立大学医学図書館所蔵の資料を中心に30数点が展示された。展示はケースを用いずすべて机上に並べ、手にとって見られるように配慮されたところは、この類の展示会としては異例のことで好評を博した。展示資料の解題は同大学の石原明先生が雑誌「医学図書館」

17(4)に発表した。

(4) 太田文庫展

昭和 47 年 5 月、京都府宮津市公民館で太田典禮所蔵の資料 2,000 点が公開された。古医書、古い医学生ノート、薬籠、ハリ人形や、新宮涼庭が長崎から土産に持帰ったギヤマンの壺(ガラス瓶)などで、地方の人々は「解体新書」などのほんものをはじめて見たと大喜びであった。

6. 資料館と博物館の建設を

現在各所に分散されている貴重な諸資料は、保管という観点からみると大かれ少なかれ危険な状態にある。地震、火災、盗難などにきわめて無防備なところにあるものが多い。いくら頑張ってみても、一個人、一法人、一図書館の力では資金や管理などの面で十分にはできない。

そこで資料館(共同資料館)建設が必要になる。共同所有にするのではなく、所有権は各自が持ったまま保管を共同にするのである。具体的には〇〇文庫室とか××図書室あるいは△△氏所蔵品室などとするのがよいと思われる。共同保管によってはじめて安全性の高い施設と効率的な管理が可能になる。これには図書館その他の各機関がまず縄張り根性をすてることが先決である。私のところには秘蔵の何々がある、という自慢の心を柵あげして秘本・秘蔵品を公開してほしい。個人・法人が足並みを揃えてゆくなら、政府からの高額な助成金も可能であろうし、公共性という点からして篤志家からの援助も求められるだろう。

資料館の施設は共同保管の収蔵庫と閲覧室にわけられる。資料の現物は収蔵保管庫におき、その公開は年に 1~2 回特別展示会を開いたり、各地に巡回展示会を開催するのがよい。閲覧の便をはかるために全国になるべく多数の閲覧所をつくる。大学図書館、公立図書館などにおき、複製、写し、写真、マイクロフィルムなど各地の閲覧所に配布して極力閲覧の便に供するようにしたい。

資料館の建設にはまず土地が必要になる。建物、独自の資料収集、購入費、保管管理運営費などいずれも大きな資金を要する。わが国は近年経済大国にのし上ったといわれながら、悲しいことに有益なことに無条件で大金を投出してくれる篤志家の少ない国柄なので、大口寄付を願うには、寄付者側が寄付金を経費でおとせる特別指定財団の認可を大蔵省から受けねばならない。それには具体的な計画や設計案とたいへん面倒な手続きを要す

る。当財団も政府や地方自治体に対して土地の払下げや特別指定財団の申請を進めているが、この準備や折衝自体に経費も相当にかかるし、また時間をかけないと急いでは実現しにくい。一財団法人の力での本格的な計画には困難がある。

そこで、できるだけ多くの力をあわせて、当初の希望のように、大規模な日本医学博物館建設へ向きたい。博物館は、資料保管研究閲覧の他に、大衆啓蒙のための展示室や会議場などを必要とする。それだけに大がかりになるが意義も大きい。

まず建設委員会をつくらねばならない。医科大学をはじめ、関連法人、学者、篤志家とあらゆる組織と個人の総力を結集して、政府や財界に働きかけ、国有地の払い下げから寄附金募集へと進む。

企画設計には、ロンドンのウエルカム・ライブラリーをはじめ世界的なモデルを見習うことができる。博物館も日本に 1 か所に限らず、数カ所設けたい。常識的には東京に本館を、京都と長崎に分館ということになるだろう。(昭和 48 年 5 月 17 日受付)

*

*

*